

## 語りの葉脈—カズオ・イシグロの語り手たち

佐藤 郁

### はじめに

...“who, in novels of great emotional force, has uncovered the abyss beneath our illusory sense of connection with the world.” (「(イシグロ氏は)偉大な感情の力をもつ小説において、世界とのつながりに対する我々の不確かな感覚の下にある深淵を明らかにした」)

“The Nobel Prize in Literature 2017 – Press Release”. *Nobel Prize*. Retrieved 5 October 2017. (<https://www.nobelprize.org/prizes/literature/2017/summary/>)

2017年ノーベル文学賞は英国の作家カズオ・イシグロ氏 (Kazuo Ishiguro, 1954-) に授与された。(以下イシグロと表記する。)我々が持っている世界とのつながりの感覚というものは、あわただしく過ごす日常生活のなかで意識されることは少ないが、あらためて考えてみれば確かに illusory (錯覚のよう、本当ではないよう) なものと言えよう。自分が関与している世界というのはたいてい狭いものだが、その限定された小さな世界でさえも、そのすべてと緊密につながっているとは言えないし、SF映画のように周囲の者がみな突然「お前なんて知らない」と言い出したら、自分が自分であることの証明をどのようにすればよいだろうか。自分と世界(他者)とのつながりは極めてあやふやなもので、それが強固なものであるとみればとずっと続くなどといったことを保証するものは何もない。自分は恋人のことを深く愛し、二人の関係はゆるぎないものと信じていても、果たして恋人も同じように自分を愛しているか、人の心の中はわからない。

イシグロは英国の最高峰文学賞であるブッカー賞を1989年に受賞し、その受賞対象作『日の名残り』(*The Remains of the Day*, 1989)が映画化されて以降は日本でも広く知られた人気作家となった<sup>1)</sup>。ノーベル賞受賞後はなおのことイシグロ作品を解説する雑誌や研究書が次々と発表されているが、本稿ではイシグロ作品の特徴である「語り手」たちの中から二人を選んで比較し、その共通点や差異を検証しながら、二人の語り手が彼らそれぞれの不確かな世界とのつながりをどうとらえていたかを概観する。扱う語り手は『日の名残り』のステイブンスと『わたしを離さないで』(*Never Let Me Go*, 2005)のキャシーである<sup>2)</sup>。この二作品を選んだ理由は、映画化されたことも一因であるが、執事と介護者(しかも特殊な)という、よくいるとは言い難い職業に従事するという共通性に着目したためである。執事と介護者、まったく共通性のない職業に思われるが、執事は主人を、介護者は患者を世話する黒子的存在、光に寄りそう影という点では同じである。

## 1. 語りの葉脈

イングロの作品を読んでいると、読者は本筋からそれた語りの迷宮に導かれることとなる。

例えば『日の名残り』（以下『日の』と表記する）の本筋はわずか6日間の中で展開する。執事であるスティーブンスは雇い主のファラデー卿から借りた車で西イングランドへ向かい、旅の宿や食堂での休息時に過去数十年間の自分の執事人生をふりかえる。本筋は本筋で存在しているので、読者はまるで一枚の葉の根本、柄の部分から葉先を目指してスタートし、左右に蜘蛛の巣のように広がる葉脈に連れ込まれ、時には行き止まりにぶつかり、ふとまた中央の太い脈（本筋）に戻って先に進む、ということを繰り返させられているような感覚を覚える。

『日の』の本筋は予定になかった場所を行きずりの人に勧められて訪ねてその美しさに感動したり、ガソリン切れで農家に一夜の宿を借りたりというハプニングを織り交ぜながら進んでいく。ハイライトはかつての同僚、女中頭のみす・ケントン（現在はベン夫人）との再会である。みす・ケントンから送られてきた手紙に復職の希望が暗に述べられているような気がしてならず、また、人手不足となっている現在の館を切り盛りするためにもぜひ復職してもらいたいという思惑も手伝って、彼女に会いに行くことを決意しての旅だった。折しも、主人のファラデー卿が留守をすることになり、車を貸すから旅行でもしたらどうかと強く勧められていたのだ。屋敷を何日も空けることはかつてなかったため腰は重かったが、結局旅に出たスティーブンスだった。

この小説は数字の代わりに「プロローグ」「一日目 夜」「二日目 朝」……「六日目 夜」というように題された8つの章から構成されている。この6日間のスティーブンスの行動が本筋である。邸を出て、旅路の果てである西イングランドでみす・ケントンと再会したのち、港の夕景を前に棧橋の灯りがつくのを眺め、そして帰宅したら主をよろこばせるためのジョークの修行にいっそう励もうと思うところで作品は終わる。（表1参照）各章には場所名も添えられているため、それだけを見ると旅日記の様相を呈している。実際、英国各地の美しい風景や田舎の人々の様子などが繊細に描写されていて、自ら英国を旅しているような気分を味わえることもこの作品の魅力である。またこの点では映画の力を借りることは間違いではない。作家の文章がどんなに見事で読者の想像力がどんなに豊かでも、「百聞は一見に如かず」は確かに存在する。執事や女中を抱える貴族の堂々とした屋敷の佇まいや由緒ある家具調度品、夏の英国の美しい景色などは、実際自分の目で見るのが一番であるが、写真や映像で見ただけでも理解の一助となる。

一方『わたしを離さないで』（以下『わたし』と表記する）の語り手はキャシー・Hという31歳の女性である。彼女の職業は「介護者」(carer)である。日本で「介護」と聞いたら、高齢者が障がい者を介護する人をまず思い浮かべるだろう。しかし、彼女が介護する対象は特別な存在、「提供者」(doners)であり、彼らの世話をするのは「回復センター」(recovery centre)という場所である。提供者が誰に何を提供し、そして何から回復するのか、キャシーがどのような介護をするのか、読者はのっけから謎に包まれる。

作品の冒頭で彼女は、この仕事を始めて間もなく12年になると述べる。従って読者は、彼女のこの12年間の仕事のことが語られていくものと当然思うわけであるが、彼女の語りの中心は介護者人生のことではなく、むしろ介護者になるまでの人生のことである。

表1

各章の表題		本筋	複筋
日時	場所		
Prologue (July 1956)	Darlington Hall	旅行に出ることになったいきさつ	新しい主人に冗談が通じず、同業の優れた執事に相談したいと思う
Day One - Evening	Salisbury	出立から最初の宿に落ち着くまでの旅路	「偉大な執事とは何か」「品格とは」、同業だった亡父の思い出
Day Two - Morning	Salisbury	早朝の目覚め	年老いる父とミス・ケントンの思い出、1923年の邸での国際会議、父の死
Day Two - Afternoon	Mortimer's Pond, Dorset	エンジン不調のため、行きずりの邸で修理を依頼	「偉大な執事とは何か」
Day Three - Morning	Tanton, Somerset	宿屋を出て、別の店でお茶	銀器磨きについて、駐英ドイツ大使の来訪、ダーリントン卿の役割
Day Three - Evening	Moscombe, near Tavistock, Devon	ガス欠のために借りた一夜の宿での出来事、ミス・ケントンの手紙の再読	ダーリントン卿の反ユダヤ主義、英独極秘会談への関与、ミス・ケントンとのココア会議や感情のすれ違い
Day Four - Afternoon	Little Compton, Cornwall	前日のできごとの振り返り	ミス・ケントンの思い出、ダーリントン卿の失墜
Day Six - Evening	Weymouth	前日のミス・ケントンとの再会の振り返り、地元男性との会話	ミス・ケントンとの前日の再会と別れ、執事人生に対する後悔

主人公のキャシーが語りに何日費やしているのかは明示されていない。冒頭で「わたしは31歳、もう11年以上介護者をやってきました」(3)と述べ、その後、年末まで8か月あると言っていることから、現在は4月であることがわかる。このように出だしと終わりは「現在」であるが、作品冒頭で3ページほど介護の仕事のことを述べたあとは、時折短く言及する程度である。彼女の語りの葉脈に現れるのは3歳から16歳まで過ごした寄宿学校ヘールシャムのこと(第一部)、卒業後のコテージでの生活と恋人トミーが亡くなるまでのこと(第二部)である。作品最終部分はトミーを失って2週間後に一人でドライブしたときの思いが語られていることから、現在はそのドライブの少し後であるものと推測される。トミーと最後に会ったのが12月、その後まもなくしてトミーは亡くなり、そして今は4月である。(トミーが亡くなったのが年内か年明けかはわからない。)『日の』と違って月日が明示されていないことは、トミーが亡くなってから現時点までの月日が主筋なのではないと理解すべきである。ヘールシャムという外界から隔絶された空間において生徒たちの人間関係は当然濃密なものとなり、嫌悪や嫉妬があっても互いに強く結ばれた存在となっている。気が強く自己中心的だが魅力的な親友ルース、優しいが癩癩持ちのトミー、優等生タイプのキャシーの三人は、椅子が二本脚では立たないのと同じように恋愛感情が複雑にもつれ合う三角関係にありながらもまるで三本脚の椅子のような関係、憎み合いながらも部分的には依存しあう関係になっている。

イシグロは「(他者の)目、視点」を通して何かを見る、理解するということへの関心が強く、また、彼自身がそのようにして育ち、それが作家として何かを書くことにおいて非常に役にたったのだと述べている<sup>3)</sup>。『わたし』という物語の主筋は、キャシーが物心ついたときからトミーを失

うまでのことだ。3歳から16歳までのヘルシヤム寄宿学校での生活、自分たち生徒が他者への臓器提供のために創り出されたクローン人間であることを知り、卒業後に提供者の介護人になるまでのいきさつ、臓器提供により親友と恋人は命を失い、自分もまた介護職を辞して提供者になる道を選んだ人生の記録である。介護者というフィルターはこの物語において必然的なものであったのか。キャシーもまた提供者であってはいけなかったのか。また、語り手が作者自身であってはいけなかったのか。

もう少し詳細に二作品の「葉脈」の部分进行考察してみよう。

イシグロ自身が大野とのインタビューで話している通り、『わたし』はミステリーでも、科学小説でもない。実際クローン人間や臓器提供のことについての詳細な説明や描写はない。またミステリアスな導入、展開となったのは、子供が成長するにつれて少しずついろいろなことを理解していくと同様の経験を読者にもしてほしかったからだといシグロは説明している。その通りに筆者自身も、キャシーが何を言いたいのか、キャシーとトミーはどうなるのか、提供者とは何かを知りたくて、キャシーの細やかな回想をもどかしく思いながら作品を読み進めた。イシグロはこの作品の執筆を始めた1990年当初、被爆した若者という設定を考えたが、うまく筆が進まずに作品をいったん放棄したのだという。「臓器提供のためだけに創り出されたクローン人間」という部分が突出して注目され、科学的な見地からこの小説を検証する記事、論文もたくさんある。しかし、イシグロが大野の質問に答えているように、本作品はSFでもミステリーでもないし、遺伝子操作への警鐘として書いたものでもない。イシグロは、本作品の前半の目的は「牧歌的な子供時代」を描くことだったと説明している。直接的間接的に大人に守られ、大人の視点を通して外界をぼんやり見ている子供の世界。子供はしばしば親の価値観をそのまま受け入れてしまい、初めからそれが自分のものであったかのように信じて疑わない。外界から距離をおいた寄宿学校という場所は、彼が考える牧歌的な世界を再現するのに最適な場所だったようだ。父親の仕事の都合で5歳で渡英したイシグロは近隣に日本人学校がなかったために、地元の学校に入学することになった。英語ができず自分の目、力で直接理解することが難しかったカズオ少年は両親の目を通して英国社会を見ることになったのだと言う。また祖国日本のことも、両親や親類のことは、視点を通してしか知ることができなかった時期が長かった。自身は子供であったし、現在のように瞬時に情報が入る時代でもない。大人になってから、自分の中にできあがっていた日本のイメージは5歳までの朧な記憶とその後大人たちを通して与えられたイメージによって形成されたものであったことに気が付いたのだ。

イシグロ作品を理解するうえで欠かせないことは、イシグロが提示するイメージそのものではなく、語り手がどのようにしてそのイメージを持つことになったか、その過程を理解することだと思われる。『わたし』で言えば、31歳のキャシーが回顧する人生のストーリーを辿ることよりも、その時々において彼女が感じたこと、どのように事実を理解するようになったか、どのように世界（外界）を見ていたか、どのように世界（他者）とつながっていたかを探ることが大事なのだ。葉の根本の部分から先端につながる一本の筋よりも、むしろその左右に縦横無尽に広がる葉脈の部分、そこそがイシグロが読者に読んでほしい部分であるのだ。どんなに細い葉脈にも水分や栄養分が行きわたっているから葉は全体が青々としており、しなびていない。それが血管であったとしたら、どんなに細い脈でも切れれば血が流れるということであり、葉全体が実は細かな脈で生かされているということの意味している。蛇足だが筆者は数独という数字のパズル遊びに興じることがある。3

×3の9つのマスの中に1から9までの数字が入り、それが1つのブロックを形成し、全体は9つのブロックがあわさった正方形をしており、計81のマスがある。全体においても、いずれの縦・横の列にも1から9までの数字が入るというルールがある。初めは81マスの中にいくつかの数字が表出しており、それをヒントにすべての数字の配列を解き明かすというパズルゲームである。単純と言えば単純であるが、解いていく過程が楽しいので、途中で解答を見てもさほど影響がない。あるマスに入る数字がどうしてもわからず、解答を見たら2だったとしよう—そうしたら、どうしてそれが2になるのかの必然性を考えることとなり、楽しさが大きく損なわれることはない。できの悪い推理小説を読んでいる途中で誰かから「犯人は〇〇だよ」と教えられて興奮して投げ出してしまふのは訳が違う。ポワロが犯人を突き止めるまでの彼の思考の過程や言動が興味深いから、アガサ・クリスティーの推理小説は今でも読み継がれているのだ。

『わたし』も同様である。気が急いてつい物語の結末を先読みしてしまったとしても、最後まで一字一句読む価値が十分にある作品である。そしておとぎ話の世界のような子供時代のちょっとしたエピソード—ヘイルシャムでの授業、陰影のある校舎や校庭の細部、交換会と呼ばれる催し、他愛ない夜のおしゃべり、成人して三人で行ったノーフォークへのドライブの思い出など、皆「キャシー・H」という一枚の肖像画を形成するジグソー・パズルの1ピースであったことが、読後初めてわかるのだ。

## 2. 職業というフィルター —語りたこと・語られたこと

『日の』でスティーブンスが語りたかったこと—それは執事の「品格」(dignity)である。良い執事の条件、何をもってして「優れた執事」と言えるかと言えば、それは「品格があるかどうか」だとスティーブンスは考える。この態度は『浮世の画家』(*An Artist of the Floating World*, 1986)の語り手、画家のオノマズジが「優れた画家とはどういうものか」「芸術家とは」にこだわるのと同様である。死後に高く評価される芸術家が少なくないように、それぞれの時代においてもはやされる芸術の風潮は変化するのが常である。オノもまた若い頃に名を成したが、時が移るにつれ、若い弟子たちとの不和や周囲の変化のなかで葛藤した。

主人に付き従う執事はどうあるべきか。スティーブンスは全編を通じ様々な例をあげて自論を展開する。1923年にダーリントン・ホール邸で開催された国際会議は主のダーリントン卿のその後の凋落の契機となった出来事だった。来訪者は政界の重要人物だけでなく、それに伴う関係者もいる。寝室の準備、食事や飲み物、お茶、娯楽の準備、すべては執事であるスティーブンスが取り仕切る。来客たちを十分もてなし、快適な滞在を提供しなければいけないが、決して焦りや困惑の表情を見せてはいけない。まさにこの会議の最中に、高齢で体調を崩していた父親のウィリアムが臨終を迎えるが、スティーブンスは執事としての仕事を優先し死に目に立ち会わずに終わる。そのことを回想するくだりが以下である。

…あれこそいろいろな意味で私の執事人生の転機だったと思います。(略) …仮にどなたかが私の執事人生を一瞥し、私が執事として歩むなかで、あの「品格」という決定的に重要な資質を

一たとえわずかでも一身に着けるに至ったと考えるとしたら、その人は恐らく1923年3月の国際会議を、私が初めてその特質の萌芽を示した瞬間として特筆するのではないのでしょうか。(73)

では「品格」とは何であろうか。スティーブンスは様々な言葉でそれを説明しようとする。「長年にわたる鍛錬と注意深い経験の積み重ね」(34)によって身に着けるもの。「自らの職業的あり方を決して投げ出すことのない能力」(43)、「外部の出来事には動じない—それがどんなに意外でも、恐ろしいものでも、腹立たしいものでも」(43-44)。そして真の執事がいるのは英国だけだと言われる所以は、イギリス人はどんなに激しい感情をも抑制することができるからだと述べる。

このような資質は執事という職業だけに求められるものではなく、おそらく英国人が考える理想の職業人の姿ではないだろうか。しかし職業道追求のあまり彼にはいつしか盲点が生じ、それをダーリントン卿の親しい友人の忘れ形見であるカーディナルという青年にとがめられる。カーディナルは、卿は紳士の道義的な精神から敗戦国ドイツを救済したいと願っているが、今はドイツ側に利用されているヒトラーの傀儡にすぎないと指摘したうえで「平気なのか、スティーブンス？ 卿がこんなふうに崖から転落しようとしているのを見ていて何も思わないのか？」(235)と詰め寄る。これに対してスティーブンスはあくまで主人を信じるという態度を頑なに貫きとおしたのである。

あくまで主人に従って一緒に心中するか、あるいは主人の憤りを買ってでも進言するか。スティーブンスの立場でなくとも、人生においてはこのような難しい場面に直面することが誰にでも1度か2度はあるものである。貴族に仕える執事だけが経験しうる困難な選択ではない。そして、人は選択を誤ることがある。時間が経って初めてそれが間違った選択であったことを理解し、死ぬまで後悔の念に苛まれるのだ。スティーブンスは私事私欲を後回しにして執事の職務にまい進するあまり、結婚のチャンスを逃し、父親の死に目にも立ち会えず(立ち会わずと言うべき)、そして大事な主人の凋落を止めることができなかつたのである。

心より尽くし信じたダーリントン卿を亡くし、新しいアメリカ人のファラデー卿に仕える今、スティーブンスはやっと「執事」という職業そのものを客観的にとらえ、そしてその視点からダーリントン卿の人生を、そして自分の執事人生を語るできるようになったのである。だからこそ、執事人生の締めくくりは、主人をユーモアで笑わせることだと納得したのである。後悔の念にたびたび胸が苦しくなる思いで続けてきたこの旅は、執事人生第一幕の終わりでもあったのだ。

イシグロはこの小説に、執事だからこそ知りえたこと—極秘の国際会議や来訪した貴族らの素顔など—の描写だけでなく、イギリス人らしいユーモアも交えている。スティーブンスは主から、ある青年への性教育を依頼される。もちろん困惑するスティーブンスだが、決してそのような表情は見せずに依頼を引き受ける。なかなか直接的に説明しにくい事柄であるので、スティーブンスもチャンスをうかがっては青年に近づきあの手この手で男女の営みについて教示しようと試みる。

『遠い山なみの光』(A Pale View of Hills, 1982) および『浮世の画家』に取り組んでいたときのイシグロは、「日本人とは何か」「日本とは何か」を考えていたに違いない。自分の記憶は自身のものなのか、後年写真や大人によって知らずのうちに植え付けられたものなのかの検証もあったろう。己の出自を問いながら挑んだこの二作品が高い評価を得たことに喜ぶ一方、イシグロは本当の英国人ではないという批判を招く結果となってしまった。イシグロがそれに答えるべく、英国人とは何か、英国人が尊ぶものは何かを追究して結実したのが『日の名残り』という作品である。

一方『わたし』は主人公自身がそう遠くない将来に死ぬことが暗示されているため、終末観、圧倒的な無力感、悲しさを否定することは難しい。他者への臓器提供のためだけに造り出されたクローン人間である主人公は、その運命にあらがうことを諦め、運命を受け入れる。受け入れた運命のなかで精いっぱい生きる—それが彼女が選んだ人生である。トミーのように痼癢を起したり投げやりになることは、普通の人間と何ら変わりはないと信じる自分の尊厳を自ら貶めることになる。トミーも最後には自分の運命を受け入れて立派に死んでいくのだが。心身ともに苦しい思いをしながら複数回の臓器摘出手術を受け、そして死んでいく—それがわかっていながらどうして自死を選ばないのか、読者としては無責任に疑問に思う。恐らく、自死は苦しみを回避する一番簡単な方法であり、ある意味それは彼女たちにとって「負け」なのだろう。さすれば、キャシーが語りたかったこととは何か。それは、突き詰めて言うならば、自分という人間がいたこと、そしてトミーやルースという人間がいたこと、存在証明ではないか。クローンであっても、生きた人間、血を流し感情を持つ人間であることは、通常の人間と何ら変わりはない。臓器提供猶予の可能性を求めてヘルシヤム時代の教師を訪ねたキャシーは、かつての恩師に次のように言う。

Did someone think we didn't have souls? (わたしたちに魂がないとでも思ったのですか?) (255)

先に問うたように、語り手キャシーが介護者である必然性は提供者を客観的に見る必要があるからである。トミーはキャシーに「提供者じゃないとわからない」と言って突っかかることがあったが、トミーは介護者の気持ちが理解できていたのだろうか。この小説の「クローン人間による臓器提供」の異常さ残酷さ、クローン人間の悲しみを読者に伝えるには、介護者キャシーの言葉が必要だったのである。

日本では1983年、世界で初の成功をおさめた英国に遅れること約5年、体外受精による初めての新生児が誕生し、報道では「試験管ベビー」という言葉が盛んに使われた。それまでは聖域とされていた生命の誕生、あるいはSFの中だけで可能と思われていた人間の命の操作が同じ人間の手によって可能となったことを知らしめるショッキングな言葉だった。(なお、受精卵は試験管の中で成長するわけではなく、受精後母親の子宮に戻される。)映画『わたしを離さないで』(2010年公開、キャリア・マリガン、キアラ・ナイトレイらが出演)では、牧歌的な幼少時代、悲愴的な運命に翻弄される若者群像を美しく描きながらも、ルースが亡くなる場面は非常にリアルに残酷に描かれている。三度目の臓器摘出手術の最中に息絶えたルースは白目を剥き、彼女から取り出された臓器、医師の手の上でほかほかと湯気をたてている臓器が、あわただしく保管容器に収められる。脚本を担当したアレックス・ガーランドは作家でもあり、原作者イシグロの友人である。原作にはルースの死の場面の直接的描写はないが、イシグロは映画に満足しているとコメントしている。美人女優として人気の高いナイトレイにこのようにグロテスクな演技を求めたのはなぜか。臓器提供という行為の重さの可視化、クローン人間製造への警鐘と理解することもできるが、製作者たちは興行成績を上げるためにただ美しく物悲しい作品に仕上げることに満足せず、映画の中の主人公たちが抱えていた心の苦しみを、生の重みを訴えたかったのではないか。

語り手は何のために何を語るのだろうか。スティーブンスの語りの中心は「執事とはいかにある

べきか」という彼の理想の執事論であった。しかし彼は、執事という職業、執事であることに固執しすぎて自分の人生をみじめなものにしてしまったことを今になって深く悔いている。父親もまた執事という職業であったことから、彼には執事以外の職業選択の意思はほとんどなかったのだろう。少なくとも作品のなかで、そのような言及や示唆はない。

一方のキャシーはどうであろう。彼女は介護者という仕事に固執しているだろうか。前提として、彼女には職業選択の余地がなかった。普通の人であれば、教師とか花屋とか料理人とか事務所勤めといった職業の選択がある。しかしヘールシャム寄宿学校出身者に許されている職業はただ一つしかない。それが「介護者」という仕事である。介護者にならなければ「提供者」になるしかないが、「提供者」は職業ではない。ヘールシャムの卒業生は英国内各地の専用施設に分散させられ、2年間かけて論文を書くことになっているが、それは名目でしかない。日常的には施設内の作業を分担して行うだけで、これといってすることがない。ヘールシャム時代と異なり外出は禁じられていないから、逃げ出すことは可能である。だが、施設から逃げ出したからと言って、自分の運命から逃れられないことは皆分かっているのである。では、キャシーは臓器提供者になる日を先延ばしするために介護者になったのであろうか。第一部の終わりでルースからトミーはあなたのことを恋愛の対象として見ていないと告げられ、そしてヘールシャム時代の思い出話をする中でルースが彼女の悪い癖である、しつこくかぶりをしていることに嫌気がさし、キャシーは三角関係に終止符を打つ。自分が二人から遠ざかるしかない、つまり介護者になってコテージを出ていくしかないと思ったのである。こうして介護者となったキャシーは「介護者」というフィルターを通して初めて、ヘールシャムという美しいが異様な世界のこと、提供者たちの運命のことを語れるようになったのである。回顧、回想をするなかで、最初はバラバラだったパズルのピースがひとつひとつ正しい場所を見つけられてはまっていくように、ひとつひとつのエピソードや思い出をあらためて手に取って見つめ直し、自分の人生というパズルの中にはめ込んでいく作業をしているかのようである。

### 3. タイトルの意味するところ

『日の名残り』(*The Remains of the Day*)というタイトルは、作品の終焉部、かつての女中頭ミス・ケントンとの再会を終えたあとで田舎の夕暮れの景色を眺める場面に由来している。そこでステーブンスは自分と同じく夕日を眺めている見ず知らずの地元の男性と会話し、その男性から「一日のうちで夕暮れ時が一番いい」という言葉を聞く。ステーブンスはその言葉に思わず涙する。私事私欲を後回しにして執事の職務にまい進するあまり、結婚のチャンスを逃し、父親の臨終にも立ち会えず、そして大事な主人を盲信するあまり主人の凋落を止めることができなかったのである。今はもう主人も大切な同僚も取り戻すことはできない。良い執事になること、良い執事であることに固執しすぎて、人間として大事なものをとりこぼしてしまったのではないかという後悔の念に胸がいっぱいになる。ミス・ケントンとの再会という旅の最終目的を果たしたものの、自分の人生の過ちに気づかされ、悲しみに包まれているステーブンスに対し、初めて会った男性は次のように話す。



いつも後ろを振り向いていちゃいけない。後ろばかり向いているから気が滅入るんだ。…いつかは休むときが来るんだよ。…人生、楽しまないと。夕方が一日で一番いい時間なんだ。脚を伸ばしてのんびりするんだ。(350)

男性のこの言葉、この場面の情景を理解するには、英国人の夏の過ごし方についての理解が不可欠である。英国では夏時間制を導入しているため、夏は暗くなるのが午後10時ぐらいである。日中の暑さが引け、涼しく乾いた風が吹き始める夕方から日没まで、一日の仕事を終えた人々がめいめい自分の好きな場所—公園や川岸、自宅の庭先など—で散歩や読書、スポーツをしたり、ただ暮れ行く景色を眺めたり、あるいは友人や家族との会話を楽しむ時間である。恐らく一年のうちでも、また一日のうちでも一番心地よい時間なのである。英国人にとってそれは仕事をしないで怠けている時間ではなく、人間らしさを取り戻す時間であり、短い人生を本当の意味で楽しんでいる時間なのだという価値観が底にある。英国の夏時間の導入は1916年のことだから、ステューブンスも長い夕暮れ時を過ごしたに違いない。

ステューブンスの年齢は定かにされていないが、恐らく50代か60代であろう。もう職業を変える年齢ではない。では、執事の職を辞して第二の人生を歩むのがよいかといえば、何かしたいことがあるわけでもない。残りの人生をともに過ごす相手もない。しかし、この作品の終結部分は決して絶望的なものではない。後戻りできない人生を少しでも明るく意義のあるものにするため、彼は今の主人、アメリカ人であるファラデー卿に尽し、彼をジョークで笑わせたいという希望を持っているのだ。黄昏の風景は人生の終末を感じさせることもあるものだが、この作品は決して悲しい絶望的な物語を語っているわけではない。原文には *the remains of the day* という表現は現れないが、男性の *'the evening's the best part of the day'* (256) という言葉は一日がまだ完全には終わっておらず、むしろあくせく生き急いだ若い年齢の後で、のびのびと人生を楽しむべきときなのだと言っているかのようである。

イシグロは処女作の『遠い山なみの光』で王立文学協会賞を受賞、続く『浮世の画家』ではブッカー賞に次ぐ権威ある文学賞と目されているウィットブレッド・ブックオブザイヤー賞を受賞した。しかし、いずれも日本に出自をもつ人物を主人公に据えたこと、イシグロ自身が1983年に帰化するまでは日本国籍であったことなどから、物珍しさも手伝っての受賞だとやっかんで陰口をたたく者もいた。イシグロが英国に移り住んだのは彼が5歳のときで、長崎で通った幼稚園以外の教育はすべて英国で受けている。両親とはいまでも片言の日本語と英語で話すが、日本語の読み書きはほとんどできないそうで、書くことにおいては、英国人でしかない。『日の』の主人公、語り手は執事である。英国貴族に仕える執事というと大ヒットしたテレビドラマ『ダウントン・アビー』を思い起こす人も多からう<sup>4)</sup>。このドラマは1912年、タイタニック号沈没の知らせが電報で館に届けられる場面から始まり、1925年までの13年間のグランサム伯爵一家の出来事を描いている。馬車が自動車に、電報が電話へと代わり、そして籠の中の鳥だった貴族の女性たちも自立を模索するようになっていく時代である。このドラマにもカーソンという重鎮の執事がおり、第6シーズンまで続いたこのドラマ全体を通じ強い存在感を放った。カーソンは女中頭のミス・ヒューズと結婚するなど、ステューブンスに比べずっと人間味のある執事として描かれている。しかし、執事という職に対する彼の責任感、プロフェッショナルぶり、そして品格はステューブンスに何ら劣るもので

はない。テーブルの上の食器の位置といった微細なことから、全使用人の把握と管理にいたるまで、執事なしには館は立ち行かない。主の伯爵や長女のメアリーなど、困りごとをカーソンに相談する者も多く、執事である彼は一家にとって必要不可欠な存在である。表舞台に立つ主を陰で支える忠実な執事—品格を尊ぶ英国紳士の国ならではのドラマである。イシグロもまた「日系作家」と括られる煩わしさを払拭するため、最高峰の賞であるブッカー賞を狙って、英国らしさを全面に出した作品を創り出したというわけである。

『わたしを離さないで』の原題として使われている‘never let me go’という言い回しは、通常恋人などに対し「しっかり抱いていて」という意味で使うことの多い表現である。作品の中でキャシーは、それが11歳のときに入手したアメリカ人女性歌手のカセットテープに録音されていた歌のタイトルであることを語る。作中に現れる歌詞の一部は“Never let me go. Oh, baby, baby. Never let me go” (266) というものであるが、babyは男性にも女性にも使われる呼びかけである。あるとき彼女は人形を固く抱いて体を揺らしながらこの歌を聴いていた。そのときのキャシーは、妊娠を諦めていた女性が奇跡的に授かった赤ん坊を失いはしまいかとしっかりと抱きしめている姿を想像していたのだと説明する。babyは赤ん坊ではなく、上述のように恋人をさすのだが、まだ大人の恋を知らない少女だったためかキャシーはなぜか赤ん坊を想像してしまう。しかし、ここにもまた複雑なしかけがある。ヘールシャムで生活する生徒たちは妊娠することを禁じられているのだ。クローン人間という特殊な存在であることから、性交は許されても、生殖は固く禁じられている。自分たちは誰かから生を受けてこの世に生まれてきたが、自分たちは生を次の世代につなぐことを許されていない。人形を抱いて歌を聴いていた時のキャシーはまだそのことを知らなかったのだが、赤ん坊(baby)は望んでも手にいれることのできないもの、手の届かないものの象徴である。物心ついたときにはすでにヘールシャムにおり、母親に暖かく抱かれた記憶のないキャシーにとって、babyは自分自身だったのかもしれない。

goには「行く」「去る」「死ぬ」の意味もあることから、このタイトルをあと数年のうちに死を迎えるであろう主人公の悲しみ、暗い末路を暗示するものと解釈することも可能である。作品の最終章で、四度目の提供の通知を受けたトミーは自分たち(キャシーと自分)を川の中にいるようなものだと例える。自分たちは最初から好きあっていただけで、川の中で強い流れに負けて手を離してしまうようになればらになってしまうのだ、とキャシーに話す。このことを回想している現在のキャシーは、川の流れが速くなったのは実はそれよりももっと前のことだったと振り返る。第16章はコテージと呼ばれる施設での生活期のエピソードであるが、その後半部では微妙にバランスが保たれていた三人の関係のターニングポイントとなる出来事が起こる。ルースのお気に入りの場所だった教会の墓地で三人で話をしているうちに、ルースがキャシーへの嫉妬からトミーをなじりからかうような言葉を畳みかける。ヘールシャム時代のトミーとキャシーの仲の良さに対する嫉妬が再燃したのだ。トミーとキャシーはこれまで恋人同士になったことはなく、コテージではルースとトミーはセックスをする恋人同士であり、キャシーは孤立していた。ルースが自分に嫉妬する理由はないはずである。それでもなお、嫉妬によって自分を除外しトミーをなじるルースに我慢がなくなり、自分が二人から去らなければ、自分もトミーもみじめな思いをするだけだと悟り、その後まもなくしてキャシーは介護人になる決意をする。

あの教会墓地でのちょっとした衝突がどれほど重要な意味を持っていたか—コテージを出てずいぶん経ってから初めて気がついたのです。(中略)

本当はあのときすでにわたしたちを引き離すような強い流れがあって、あとほんのひと押しがあればよいだけだったのです。(194)

作中、臓器提供者たちの命が長いものでないことが明らかになっていく。臓器の提供を続けていけば当然その提供者の健康は損なわれる。一度目や二度目で亡くなることもあり、四度目の提供をするとなると、たとえ手術自体は乗り切ったとしても、そのあとの人生は長くない。「川の中の二人」と言われたキャシーもまた、以前吹きすさぶ風の中、トミーにしがみついていたときのことを思い出し、何も言うことができない。愛しいあいつ求めても、四度目の提供を控えるトミーにとって、キャシーの優しさはかえってつらいものでしかないと、キャシーも理解したからである。別れを決意した二人の最後の会話は、学校時代、ヘルシヤムでのちょっとした思い出話だった。キャシーは笑って、昔よく言ったように「ばかみたい」と言う。それは、運命を知りながらそれに抗おうともがいていた自分たち自身への嘲笑だったのかもしれない。二人にはもう未来はないのだ。

親友でありながらトミーをめぐって三角関係にあったルース、そしてトミーもまた使命を終えて亡くなる。二人を失ったキャシーは、優秀な介護人であることを自負しながらも、介護人であることに疲れ、そして介護人としてトミーを看取れなかったことにより、介護人を辞することを決意する。川の中で流れに負けて離してしまった手を、自分もまたトミーと同じ道をたどることによってつなぎ戻したいと思ったのかもしれない。自分がつないでいたその手はトミーのものでもあるし、自分に生を授けてくれた未知の母親の手でもあるかもしれない。また、自分の手でつかんでいたものは自分自身の命、自分の魂だったのかもしれない。風に吹きさらされるビニールの切れ端はキャシーの心象風景そのものである。自分はいったい何者なのか。世界とどうつながっているのか。空き地に張り巡らされた有刺鉄線に引っかかっているビニール、かろうじてそこにとどまってはいるが、ぼろぼろになって風になびいているビニール。映画でも描かれるこの情景は実にわびしく物悲しいものであった。

この作品はただ暗いだけ、絶望的なだけの作品なのだろうか。もしある日突然周りの誰もが自分のことを「知らない」と言ったらどうするだろうか。ばかげた空想の世界の話のようだが、認知症の患者の中には自分の名前も家族の顔も忘れてしまう人がいるという。自分とは何であるか、自分が自分であることをどうやって説明するか。人を人たらしめているのは他者である。他者との関係の中にしか自分はいない。名前は他者と自分を区別するためにあり、他者が自分を認識するために必要なものだ。では自分が自分でなくなったら（自分の名前を忘れ、家族の顔もわからなくなってしまうたら）、その人の過去も現在の生も皆無意味なものになるのだろうか。身寄りなく死んでいく人の人生はすべて無意味なものだろうか。世界、他者とのつながりは不確かである。その不確かさを少しでも確かなものにするため、キャシーは必死に思い出を拾い集めてパズルを完成させたのだ。

## おわりに

日本でも病気のため臓器の移植を待つ患者は少なからずいる。日本ではあまり知られていないが、ヒトに近いサルからの臓器移植は1960年代から米国にて試みられている。米国には臓器移植のために無菌状態でヒヒを養殖する施設がある。2012年ノーベル生理学・医学賞を受賞した京都大学の山中伸弥教授らの研究によりヒトのiPS細胞から組織や臓器形成の可能性が証明されたが、*Never Let Me Go*の執筆が開始された1990年代はまだその時代ではなかった。英国はフランケンシュタインを生んだ国、そして完全クローン羊のドリーを創り出した国である。イシグロはドリーのことを念頭にあったのかと大野に尋ねられ、それ以前にクローン人間という着想を得ていたのだから全くの偶然だと、関連性を否定している。英国だからということではなく、全世界でクローンや細胞の再生はもう身近な問題になりつつあるということだろう。折しも本稿執筆中に衝撃的なニュースが世界を駆け巡った。中国の医師が受精卵のゲノム編集によってHIVウイルス感染リスクを排除した乳児の誕生を成功させたというものである。遺伝子組み換え、クローン、iPS細胞、ゲノム編集…この先は何が来るのだろうか。我々の世界とのつながりはますます不確かなものになるに違いない。そのような時代の到来が予想される今、カズオ・イシグロにノーベル文学賞が授与されたことの意義は深い。

### [注釈]

- 1) 『日の名残り』(初版1989年)よりの引用は、すべて Kazuo Ishiguro, *The Remains of the Day* (2005, London: Faber and Faber) によるもので、引用文末のカッコ内にページ数を示す。なお日本語訳は、土屋政雄訳『日の名残り』(早川書房、2001年)を参照しつつ、筆者が訳したものである。
- 2) 『わたしを離さないで』(初版2005年)よりの引用は、すべて Kazuo Ishiguro, *Never Let Me Go* (2005, London: Faber and Faber) によるもので、引用文末のカッコ内にページ数を示す。なお日本語訳は、土屋政雄訳『わたしを離さないで』(早川書房、2008年)を参照しつつ、筆者が訳したものである。
- 3) 大野和基 インタビュー・編『知の最先端』PHP研究所、2013
- 4) ロンドンのテレビ番組制作会社カーニバル・フィルムズ社が制作、英国ではITVという放送局が2010年秋から2015年秋までの5年間にわたり6つのシリーズ、計55話を放映した。第一次世界大戦、アイルランド紛争、婦人参政権運動などの時代背景を忠実に描き、細部まで本格的に再現された衣装や調度品が創り出す世界観が世界中の人々を魅了した。エミー賞、ゴールデングローブ賞など多数の賞を受賞、約250の国で放映された。

### [参考文献]

- Ishiguro, Kazuo. *An Artist of the Floating World*. London: Faber, 1986.
- Groes, Sebastian and Lewis, Barry ed. *Kazuo Ishiguro New Critical Visions of the Novels*, Palgrave Macmillan, UK, 2011
- Procter, James D. "Critical Perspective" <https://literature.britishcouncil.org/writer/kazuo-ishiguro> (2017)
- Sim, Wai-chew. *Kazuo Ishiguro*, Oxon: Routledge, 2010
- 飛田茂雄訳、カズオ・イシグロ作『浮世の画家』早川書房、2006
- 長柄裕美「カズオ・イシグロ作品にみる語りの間接性—「空白」と「入れ子構造」の効果—」広島大学英文学会『英

語英文學研究』62巻、pp.59-71, 2018

原 英一 「カズオ・イシグロの文学—マジック・リアリズムと沈黙の語り—」東京女子大学『比較文化研究所紀要』78巻 p.41-57, 2017

平井 法 「Kazuo Ishiguro 作 *Never Let Me Go* 考—この哀しみはどこから来るのか—」昭和女子大学『学苑・文化創造学科紀要』No.829、2009

青土社『ユリイカ 詩と批評 特集カズオ・イシグロの世界 2017年12月号』第49巻第21号（通巻714号）

別冊宝島編集部『カズオ・イシグロ読本—その深淵を暴く—』宝島社、2017

## Veins of Narrations: Storytelling in Kazuo Ishiguro's Novels

SATO Kaoru

The works of Kazuo Ishiguro, the Nobel Prize winner for Literature in 2017, are characterized by the 'illusory sense of connection with the world.' It is true that our relationship with others is unreliable and not guaranteed forever. We, however, are not able to identify ourselves except in the relationship with others.

In *The Remains of the Day* (1989), Stevens, a butler, narrates in details the memories of Darlington Hall and the decline of his lord. He glorified and justified the past from his perspective as a butler. In *Never Let Me Go* (2005), Kathy, a carer of donors, tells her hapless fate of a cloned human. She needs the perspective of a carer to tell her sad and harsh life story. These two narrators lead us readers into the leaf veins of narrations. Their narrations have structures which remind us of those of leaves.

The purpose of this paper is to make a comparison between the two narrators, Stevens and Kathy, and to examine what they would like to tell about their connections with the world.

### [Key words]

leaf veins, narrator, connection with the world, perspective